KONAN UNIVERSITY

明治末期から大正に見る、戸川秋骨の評論・随筆
―大逆事件・発禁・関東大震災・笑い―

著者	塚本 章子
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	173
ページ	一三-二一
発行年	2023-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00004432

明治末期から大正に見る、戸川秋骨の評論・随筆

――大逆事件・発禁・関東大震災・笑い――

塚本章子

はじめに

大正四年三月、馬場孤蝶は衆議院選挙に立候補する。この立候補の動機として、明治四三年に起きた大逆事件に対する抵抗と、思想・言論の自由への抑圧や発禁処分強化に対する批判があったことを、私は以前に述べた。(1) そしてこの立候補に際し、『孤蝶馬場勝彌氏立候補後援現代文集』（大四・三、実業之世界社、以下『現代文集』）が出版され、八一名の作家たちが原稿を寄せて応援していることについても論じた。(2) この『現代文集』に、かつて孤蝶と共に『文学界』同人であった平田禿木の文章が掲載されている。だが、やはり同人であった戸川秋骨の掲載はない。しかし、『第三帝国』第三三号（大四・二）の『現代文集』の広告には、執筆者に秋骨の名が含まれている。(3) この時点では秋骨も執筆者として予定されていたが、何らかの事情で掲載に至らなかったと考えられる。

明治二〇年代、西洋文化に目を向け自由な精神を求めた『文学界』の一員として、孤蝶と秋骨は若い時代を過ごした。秋骨は『文学界』に「変調論」（第一三号、明二七・一）等を書いたことでも知られている。また、秋骨が孤蝶と共に樋口一葉との交友も持ったことも、よく指摘される。一葉の日記には、秋骨が孤蝶と一緒にあるいは一人で、頻繁に一葉宅を訪れていたことが記されている。

その後、明治末期から大正にかけて、思想・言論の自由が抑圧されていく時代を、孤蝶は衆議院選挙立候補というかたちで格闘していたといえる。では秋骨は、この抑圧をどのように捉えていたのだろうか。

本稿では、この時期に新聞・雑誌等に掲載された、秋骨の評論・随筆を探りたい。秋骨も、大逆事件以前の思想・言論の抑圧について、そして幸徳秋水の処刑に関連して、またその後の発禁強化について、鋭い言葉を残している。それらは秋骨の多くの評論・随筆のなかに時折現れる、断続的なものである。だが集めてみると、この時期の秋骨に、思想・言論の自由への抑圧に抵抗し続けた一面があったことが見えてくる。また彼は、民本主義や、関東大震災で殺害された大杉栄に関する文章も書いている。

秋骨は、『文学界』以降も多くの評論・随筆を書いているが、この時期の文章はあまり注目されていない。笹淵友一氏は『「文學界」とその時代　上』（一九五九・一、明治書院）で、「尤も三十四・五年以来彼は再び「帝国文学」「明星」等に執筆し、翻訳家としても活動するが、（略）秋骨の主体的な文壇的活動は「文学界」時代をもつて代表されてゐる」と述べ、その後の文章にはほとんど言及していない。

だが坪内祐三氏は、「戸川秋骨のエッセイについて」(4)（『図書』第六四六号、二〇〇三・二）で、「明治文学史にその名を輝かせている透谷や藤村よりも、私は、晩年になって滋味あふれるエッセイや回想文を発表していた孤蝶、禿木、秋骨の三人組の方が好きだ。中でも一番、私の体質に合っているのが秋骨のエッセイだ。」と述べている。そして氏は、『戸川秋骨　人物肖像集』（二〇〇四・三、みすず書房）を刊行している。(5)

秋骨の評論・随筆の一端を探りたい。

一

大逆事件前の秋骨の評論・随筆を見る。先に述べたように、孤蝶立候補は大逆事件や思想・言論の自由への抑圧に対する抵抗という面を持っている。このことを考察し、当時の新聞・雑誌記事を辿るなかで見えてきたのは、社会主義批判は、自然主義文学、個人主義、女性解放への抑圧と並行して起きており、西洋思想全体への抑圧としてあった。そしてそれは同時に、儒教道徳の隆盛と連動していたということである。(6)

秋骨は、このような動きを批判している。明治四一年一一月「女優、社会主義、而して儒教」（『明星』申歳第一〇号）を見る。

牧野前文相が新任の当時訓令を発して青年輩の濫り煩悶することを戒め、同時に社会主義に対して注意する所があつた。僕は当時此の訓令を以つて如何にも因果本末の理を解しない迂闊の見解として笑つたのである。爾来煩悶病がどうなつたであらうか、苦悶病は一寸見廻はした所では無くなつたのであるが、（略）遂に稍々基礎の立つた主義となつて顕はれた。自然主義が煩悶病の正当な後身ではあるまい、併しその近い血縁であることは容易に証明される。それ故自然主義に全然賛成なれば、文相の前に出した煩悶病に対する警戒は無用のものとなり、また前のが必要のものであつたとすれば、文相は自然主義禁圧の訓令を出さなければならなかつたのである。

秋骨は牧野前文相が新任当時の訓令で、青年の「煩悶病」を戒めたことを取り上げ、それが起点となって自然主義が「禁圧」されていると述べる。さらに秋骨は、社会主義に関しても同様である。曩日の文相の訓令は何程の効果があつたであらうか、社会主義は益す瀰つて来ると云ふ事ではないか。それ故近頃は又た特に甚しくこれを圧迫する方針が其筋にあるとか聞いたが、それが又た前の訓令同様の結果になる。凡そ物事は圧迫すればする程される者の勢力は加はる。という。そして、「近頃又た儒教復興の声を挙げる者があるとか聞いた。（略）僕はこれを以て失望の声と見る。寧ろ卑怯の叫と云ふ。」と、儒教復興を危惧している。

秋骨は、政府が警戒するのは逆効果になると、自然主義や社会主義への抑圧を皮肉を込めて批判しているのである。(7)

秋骨が批判している牧野前文相の新任当時の訓令とは、次のようなものである。明治三九年六月九日付「文部省訓令第一号」（『官報』六八八二号）を見る。

学生生徒ノ本分ハ常ニ健全ナル思想ヲ有シ確実ナル目的ヲ持シ刻苦精励他日ノ大成ヲ期スルニ在ルハ固ヨリ言ヲ俟タス殊ニ戦後ノ国家ハ将来ノ国民ニ期待スル所益々多ク今日ノ学生生徒タル者ハ其ノ責任一層ノ重キヲ加ヘタルヲ以テ各々学業ヲ励ミ一意専心其ノ目的ヲ完ウスルノ覚悟ナカルヘカラス

然ルニ近来青年子女ノ間ニ往々意気銷沈シ風紀頽廃セル傾向アルヲ見ルハ本大臣ノ憂慮ニ堪ヘサル所ナリ（略）近時発刊ノ文書図書ヲ見ルニ或ハ危激ノ言論ヲ掲ケ或ハ厭世ノ思想ヲ説キ或ハ陋劣ノ情態ヲ描キ教育上有害ニシテ断シテ取ルヘカラサルモノ尠シトセス故ニ学生生徒ノ閲読スル図書ハ其ノ内容ヲ精査シ有益ト認ムルモノハ之ヲ勧奨スルト共ニ苟モ不良ノ結果ヲ生スヘキ虞アルモノハ学校ノ内外ヲ問ハス厳ニ之ヲ禁遏スルノ方法ヲ取ラサルヘカラス

又頃者極端ナル社会主義ヲ鼓吹スルモノ往々各所ニ出没シ（略）建国ノ大本ヲ藐視シ社会ノ秩序ヲ紊乱スルカ如キ危険ノ思想教育界ニ伝播シ我教育ノ根柢ヲ動カスニ至ルコトアラハ国家将来ノ為メ最モ寒心スヘキナリ事ニ教育ニ当ル者宜シク留意戒心シテ矯激ノ僻見ヲ斥ケ流毒ヲ未然ニ防クノ用意ナカルヘカラス

牧野は、「有害」な図書を禁止し、自然主義と社会主義をひとまとめに「危険」とみなして、教育から排斥しようとしていたのである。(8)

秋骨が、明治四一年一一月になってこの牧野前文相の訓令を持ち出したのは、当時の小松原文相の動向、例えば次のような発言を受けてのことと考えられる。(9) 同年八月一五日『読売新聞』「小松原文相演説」を見る。

昨日文部省夏期講習会証書授与式席上に於て小松原文相のなしたる演説の要旨は左の如し

（略）学生風紀の振粛は時弊矯正上頗る必要なるを以て文部省は明治三十九年訓令を以て訓示する所あり爾来茲に弐年有半職に教育しある者は同訓令の旨趣を体して熱心尽力せらるべきことと信ず然るに学生の風紀は今尚ほ充分に振粛

されずして種々の非難を受くる場合甚だ多し願くは教職にある者は将来一層の注意を以て益々其実蹟を挙ぐることに奮励せられ且つ常に家庭とも連絡を通じ以て平素の行状を審にし常にその指導を誤らざらんことに留意するは最も必要なることと信ず

小松原は、明治三九年の訓令に基づきこれを強化しようとしていたのである。また、秋骨が「近頃は又た特に甚しくこれを圧迫する方針が其筋にあるとか聞いた」というように、警視庁の取締も強化される。その一例として、同年九月五日『読売新聞』「社会主義取締策」を挙げる。

社会主義は之を学理として研究するは可なるも一知半解の同主義者が我国の制度組織の如何を弁へず猥りに国家を呪咀するが如きは大に取り締りを要す思ふに警視庁が現今採りつゝある取締法即ち図書に注意し図書館の貸出を謹む如きも一便法ならん彼の自然主義文学の中にも頗る注意を要すべき者あり之れに対する警視庁の態度を非難する者あるは唯に自己の一身を見て他を知らざる者の言の如と某司法当局者は語れり

先に挙げた秋骨の文章は、このような政府の動きに対する批判であるといえる。

秋骨は同じ問題を、明治四二年一〇月「政治と近代思想」（『太陽』第一五巻一三号）でも論じている。三章構成の評論であり、（一）では社会主義について書かれている。

今日では社会といふ文字にかれ等は恐れをなして居る。苟も社会といふ文字さへあれば少しの容赦もなくこれを叩き潰さうとして居る。社会主義にも色〳〵あるが、現在東京に出没するその主義者の多くは実に厭ふべきものである、（略）併しそれにも拘はらず社会主義的な思想は現代の思想である。社会主義者を厭ふは宜しい、或は主義其ものを排斥するのも宜しい、（略）併しながらその傾向をもつた思想、その色彩を帯びた思想は其下に游漫して居る。日本の天下ではない、世界の天下に普及して居るのである。そして牢乎として抜くべからざる近代の思想である、而かも流行的一時的のものではない。歴史的に秩序的にまた論理的に発展して来たのである。その主義を好むは別として政治家は深く此問題を考量しなければならぬ。

秋骨は、社会主義的な思想は世界に普及している現代の思想であり、歴史的に発展して来たものであるから、政治家は深く考えなければならないという。

（二）では、自然主義へと展開する。

併しながら現代思想は只社会主義的思想の独有ではない。（略）此数年来漠然と吾が文壇に自然主義と言はれて来たものもそれである。此自然主義がまた社会主義のやうに現代思想でまた普通的で、牢乎として動かすべからざるものであると共に、其末徒に於ては随分嘔吐を催させるものがある、（略）併しながらこの主義の大体の傾向は人心の新らしい覚醒である。（略）左様して丁度此場合にも政府の取締監視は正しく誤つて居るかの観がある。

秋骨はこのようにいう。そして、「為政者は宜しく今日の文学の後援が欧洲にある事に注意して、今日の所謂文学を叩き潰すつもりならば、欧洲の文学を叩き潰すやうに考へなければなるまいと考られる。（略）社会主義や文芸を取締るのも宜しいが、それを掏摸や窃盗の検挙と同様に心得てやつては大間違であるのは良いとして、やがてそれが自分等の叩き潰ぶさうとするものを成立させる事になる。」と述べている。

秋骨は、自然主義も「新しい覚醒」であると述べる。そして、自然主義を叩き潰す事は「欧洲の文学を叩き潰す」ことであり、社会主義や文芸を取締れば、かえってそれらを成立させると警告している。

（三）では、次のように指摘している。

此科学的思想なるものは西洋の宗教とは一致の出来ないものである。宗教ばかりではない、古い思想、古い経験とは一致の出来ないものである、或る意味に於ては破壊的のものである、無神論となり、唯物論となり、懐疑論に至らしむるものは此科学的思想である。明治の初年に科学を教育に採用した時には其処まで気がつかなかつたのか、今日に至つてそれが解つて来たので、一部の教育家は困つて居るやうである、これは当然の事である。大きくいふと今の為政者の恐れて居る社会主義も新興文学もこの科学的思想から来て居ると云つても良い位である。

秋骨は、科学的思想は古い思想や経験に対して破壊的であり、社会主義も自然主

義もこの科学的思想から来ていると述べる。さらに秋骨は、総理大臣も文部大臣も「科学思想が何やら新興文学が何やら一向了解だに出来て居ない」と、批判する。

次に見たいのは、秋骨が同時期に、個人主義や自我について述べた文章である。「誤られたる自我主義」（『東京毎日新聞』、明四二・二・一二～一三）では、「強い個人主義を其のまゝ日本に輸入すると、昔からの家族制度と衝突するとか云つて杞憂を抱く人もあるが（略）自我の意識を強くするといふ事は大変結構だと思ふ。老人どもが元気がない気力が無いと云つてゐるけれども、本当の気力は恁ういふ処から出る」という。そして、「もしイプセンや『マグダ』に見えるやうな本当の自我を発揮する事が出来れば、昔の道徳で云つた気力又は元気と変らない、むしろ其れに勝つたものが出て来るのでは無いか。」と述べ、自我の発揮を重視しているのである。

このように、秋骨は評論・随筆で自然主義や社会主義が抑圧されることに抵抗し、それらが科学的思想をもとに発展してきた世界的な思想や文学であることを指摘している。そして、それらの抑圧は西洋思想や文学への全面的な抑圧に他ならないと述べ、政治家を批判している。また個人主義批判に対しても、自我の発揮を肯定しているのである。

二

明治四四年一月、大逆事件で囚われた幸徳秋水ら一二名の処刑が行われる。秋骨は、このことに沈黙していたのではない。同年三月一九日『読売新聞』に「笑のなき時代」と題する文章を書いている。少し見る。

幸徳伝次郎君は笑はない人である。私はその人に面接した事はないので、果してその顔面に笑の顕はれるか否かを知らぬが、その書いたものには一点の笑をも認める事は出来ない、さればその人生観には余裕がない、余裕がないから真剣ではあらうが、果してそれに依つて物真を得る事が出来やうか、頗る疑はしい。

秋骨は、秋水を「笑はない人」、「余裕がない」と評している。[10] だが秋骨は、現代は「切迫つまつた時代」であり、「此の時代に於て個人に向つて余裕を保て、笑を示せと云ふのは或は無理なる注文かも知れぬ。幸徳君に笑のないのを咎めるのは無理であらう。」と述べ、秋水を擁護している。また、自然主義についても併せて言及し、次のように続けている。

自然主義文学の常に張瞻瞑目して居るやうな趣を示して居るのはむしろ当然な事かも知れぬ。第一現代のヨーロッパの思想が尽く余裕のないものである。今日のヨーロッパは社会主義、個人主義、自然主義、虚無主義等の時代である。この間に産出する文学がこれ等の思想を伝へるのも当然な事である。所謂一部の人の危険なる思想と云ふものは一代の思潮である。（略）これ等の思潮は益々社会を風靡して行く。吾が思想界も自から此の大勢に順つて進んで居る。

秋骨は、「危険なる思想」は「社会を風靡して行く」と指摘している。さらに、「一部の人の恐るゝ所謂危険なる思想以外今日の人心を動かす思想は一つもないのである。いくら論語を安く売り、四書五経をポケットに入るゝやうにしても、迚も追付く事ではない」という。

だがこのように述べつつ、秋骨は、「私はその間に於て何処かに余裕をほしく思ふ。人間の人間らしき笑をほしく思ふのである。同じく社会主義、同じく現代主義でも、私はイギリスに於けるショウの劇曲を好む。その可笑味の心持を有難く感ずる者である。」という。そして、「仏蘭西革命の時代は余りに真面目であつた。その間に一点の笑ひもなかつた。（略）私は笑を欠く事が、斯くの如き恐るべき時代を演出しはしないかと云ふ事を恐れる」と、笑いの重要性を指摘するのである。

笑いという視点から述べられた批評である。そしてこれが、秋骨の独自性であるともいえる。こういった視点から、秋骨が大逆事件後、秋水を擁護しつつも、秋水とその時代に欠落している要素を指摘する文章を掲載していることに注目しておきたい。

事件後、西洋思想への警戒が一層強まると同時に、儒教的道徳の隆盛も顕著になる。発禁処分は厳しさを増し、西洋文学も危険視される。秋骨は、このことに抵抗している。明治四四年四月一八日『東京朝日新聞』「危険ならざる文学とは何ぞや（上）」を見る。[11]

秋骨は、「今日流行するヨーロッパの文学例へばトルストイとか、イプセンとか、ヴエテキントとか云ふ作者の小説や戯曲が危険な文学であると云ふ事に少しも異議はない。」と述べ、これらは「危険な思想を持つて居る」という。だが、「異議のないと云ふのは、電車の危険であると云ふのに異議のないと云ふのと同じ」であり、これらを恐れるのは「自分の意気地のない事を示すもの」で、「恐れ嫌つても輸入されざるを得ない」という。

そして、次のように述べている。

現代に於ける立派な文学と云はれるものは、總てみな所謂危険なる文学で、片仮名に依つて今日紹介され流行して居る歐洲の文学は、その凡てゞあると考へるのである。苟も外国文学一切を禁止するならば宜しいが、さもなくば少したりとも外国文学を紹介するならば、所謂危険なるものは是非伴はなければならぬ、伴ふではない是非その主要なものにならなければならぬ。（略）これ等の文学は現代のヨーロッパを支配して居るのである。若しそれ一切の外国思想を杜絶して、武士道と儒教とを以て凡てをやつて行くと云ふのは少し無理である。

さらに秋骨は、「西洋の文学のみではない孔孟の書でもこれを見るに今日の考を以てすれば、或は危険なるものとならぬとも限らぬ。恐らくキリストの教へから社会主義を引き出し得ると同じく、孔孟の教へからも社会主義を演繹し得ぬとも限らぬ。」と述べるのである。

このように秋骨は、西洋文学が危険視されることを批判し、危険を伴わない立派な文学などないと説く。そして、西洋思想を排斥して「武士道と儒教」でやっていくことは不可能であると述べている。

また、同年一二月「自然主義から耽美主義へ」（『早稲田文学』第七三号）で、秋骨は次のように書いている。

今年の文壇は、概して言へば荒涼落寞を極めて居たと言へる、（略）つまり前内閣が政府として持つて居る全ゆる方法、所謂官憲の威力を濫用してたとへば自然主義と言ふ様な思想を一種の危険なものであるかのやうに考へ、それに依つて折角発達しかゝつた文芸を滅茶にした。その悪い結果が今年に成つて現はれて来たので、謂はゞ折角出かゝった花の蕾をもぎ取られて了つた観がある。

そして、「今年の文壇の一般傾向は快楽主義的で、その原因の一は自然主義の余り切迫した様な反動であり、他の一は真面目な思想を強ゐて政府が圧迫し来つた結果だと見られる。」と述べている。

この文章の表面に出ているのは自然主義であるが、「官憲の威力を濫用して」、「真面目な思想を強ゐて政府が圧迫し来つた結果」といった言葉には、大逆事件への批判が込められていると見ることも出来る。

秋骨は、大逆事件を独自の視点から捉えている。そして、益々厳しく文学が検閲されていくことを憂えているのである。

三

大正に入ってからの秋骨について見る。

秋骨の発禁処分に対する批判は続いている。孤蝶立候補から一年三ヶ月後、大正五年六月の「発売禁止の恐れなき文芸の価値」（『三田文学』第七巻六号）では、次のように述べている。

秋骨は、「「ボヴアリ夫人」の翻訳は出版を禁止された、「女の一生」も同様である。嘗てはモリエルさへも禁止された。」といい、「他の事は何事でも西洋に感心してしまつて、文芸の一事になるとこれを排斥しやうといふ」ことに、「惑はざるを得ない」と述べる。そして、「今かりに吾が官憲の眼を以て見た標準に依り、古今の文芸からその当然禁止すべき要素を抜き去つて見たら」、「残る処は如何なものになるであらう。」といい、各国の文学に言及した後、「文芸から吾が官憲の標準を以てした発売禁止の要素を除外したものゝ、価値のない事は了知される」と指摘している。

さらに、「イギリスの例から見ても発売禁止と云ふ事が所謂官憲の目的を達する所以でない事が知れやう、何となればさう云ふ点に於てもつと自由であつた方が、危険思想なり秩序紊乱なりを防ぐ所以であるからである。」という。そして、「古今東西を問はず苟も文芸と称して長い生命を保つて居るものゝ内には、みな発売禁止的の要素は入つて居る事を自分は断言して憚らない。」と述べ、発禁を批判してい

る。

次に、大正六年六月「官憲国の文学」（『三田評論』第二三九号）を見る。秋骨は、日本は「何事も官憲の力に依つて居る」という。そして、「併しながらこゝ官憲国に一個全く官憲の手に依らずして発展して来た一天地がある。そしてこれ丈けは恐らく今後と雖も恐らく官憲の手の如何ともすべからざるものとして残るであらうと思はれる。それは文学の世界である。」と述べている。

さらに、「徳川時代には外国といふ要素は」ほとんど無かったが、「今日になつては外国といふものを除外して考へる事は出来ぬ。否むしろ外国文学の刺激に依つて今日の文学は発展して来た」と指摘する。そして、

最新の外国文学は一言にしてこれを蔽へば反抗の文学である。（略）反抗とは教権に対し、学問に対し、政治に対し、社会に対し、風俗に対し、道徳に対し、あらゆるものに対して顕はれたものであるが、それ等が一と纏めになつて、一時自然主義文学と言はれて横行したのである。今や自然主義といふ名は衰へたし、その軽佻な態度は排斥されてしまつたが、然しながら、さらに深いさらに真面目な考は、なほ強く人の心に沁み込んで来てゐる。

と述べている。そして、「官憲国の文学があらゆる圧迫を受けながら、徒手よく今日の状態にまで及んだのは偉とすべきである。（略）今日の露西亜文学を生んだものは露西亜政府とその教権との圧抑である。かくて吾々は官憲万歳、を叫ばざるを得ぬのである。」と、皮肉るのである。

秋骨は、官憲からの文学の独立を誇りとし、「外国文学の刺激」を重視し続けているのである。

秋骨の大正期の評論・随筆から、他にもいくつか見ておきたい。

「古い心新しい心―私の嫌ひな武士道」（『東京日日新聞』、大一〇・五・四～六）を挙げる。秋骨は「私は武士道が大嫌ひです。」という。そして、「元来が大した事でもない武士道」を、なお「簡単にして卑近にして見せたもの」として「旧芝居」を挙げ、「お芝居で見る武士道とか忠義とかを真に受けて、誰れでもそのやうにしなければならぬやうに教へたりするものゝあるのは驚くの外ありません。」と述べる。そして、次のようにいう。

思想家は申すまでもなく、政治家が思想に生きて居れば、それがその時代の生命となります。（略）私は今日思想の指導をかれこれ云ふものゝ、（略）みな自分が深くそれに生きて居ないで、只皮相の考へから、若くは只国のためとか社会のためとかにせよ、単に利用厚生のために、それを説いて居るのであらうと考へます。さうでなければ、それは今少し知識階級の心を動かし得る筈なのですに、それが旨く行かないで、却つて自分達の恐れて居る所謂危険思想とかいふもの――それは何であるか知りませんが、事実危険でも何でもなく、むしろ廣く世間のためになるものかも知れませんが――そんなものに困つて居るのは、正しくその証拠ではありますまいか。

秋骨は、政治家が「思想に生き」ることもなく、「危険思想」を恐れている状況を批判しているのである。

またこの文章のなかで秋骨は、民本主義についても批判している。「私の親父も私以上に武士が嫌ひでした。（略）そして立派な民主々義者でした――ことわつて置きますが、それは民主々義で、決して民本主義ではありません、私は又民本主義といふものが大嫌ひです。或は武士道以上に嫌ひかも知れません。民本主義といふやうな胡麻化しが、尤も現代的でまた尤も有害なものでせう。」と述べる。武士道を嫌うとともに、民本主義も「胡麻化し」であるというのである。

このことは、他の評論でも述べられている。「デモクラシイの涙」（『三田評論』第二六二号、大八・五）では、

兎に角デモクラシイは帝王の友ではあるまい。アメリカの共和政治位が、正しくその真相ではなからうか、それを吾が国体に悖らないとか、東洋の王者がデモクラシイであつたとかいふのは、以の外の事ではあるまいか。デモクラシイを日本語になほすと、民本主義だなどと変な胡麻化しを言つて得意になつて居るのも厭な心持がする。何処までも民主々義なら民主々義にして置いたら怎んなものなのだ。その上でそれが悪いものなら何処までも退治して仕まふが良からう。煮え切らない所謂不徹底は自分のやうな微温主義者でも嫌ひである。

と述べている。

また、「米の飯と国風」（『三田評論』第二七二号、大九・三）では、「不徹底は日

本の特色である。流行のデモクラシイは当然民主々義と云ふべきものである。そして自分の考へにして間違はないとすれば、それは或る人の唱へて居るやうな国風とは両立しないものである。それを近頃は民本主義などゝ呼び出して胡麻化して居る。」と述べている。

秋骨は、これらの評論でも、民本主義を「胡麻化し」と捉えているのである。

他にもう一つ、見ておきたい文章がある。大正一二年九月に起きた関東大震災で大杉栄が殺害されたことについて、秋骨は「他界の大杉君に送る書」（『随筆』第二巻一号、大一三・一）という印象的な文章を書いている。秋骨は、亡き大杉に呼びかける。

貴下はどうも幸運な方です。兵隊に殺されたと言へば不幸のやうですが、あれが一段と貴下の名を高くしたではありませんか。（略）世間は余程社会主義者の説いて居る政治に近くなつて来て居るではありませんか。世間は社会主義といふ名称を恐れながら、その実に就いては随喜して居ます。随分変なものですネ。

このように屈折した表現で、敢えて「幸運」と言って大杉の死を昇華させ、彼を讃えるのである。そして、「私は貴下の事から、不幸な人が出来た事を悲しみます。それは下級の憲兵諸氏です、この人々こそ実に天を仰いでも地に伏しても（略）浮ばれない人々です。」と述べ、「極楽なんか貴下はお嫌ひ」で「地獄」におられるだろうが、「一つ貴下からお閻魔様に願つていたゞいて、その兵士諸君の減刑をして頂きたい」、なるべくなら「無罪にして上げて貰ひたい」と、憲兵たちの減刑を大杉に頼むのである。

独特な追悼の文章である。滑稽といえば滑稽であるが、裏に鋭い洞察と、殺害への強い批判も読み取れる。同時に、大杉の大様な人柄への親愛といったものも感じられる。これは、秋骨渾身の、鎮魂の文章であるに相違ない。

このように秋骨は、大正に入ってからも発禁への批判を続け、文学の独立、民主主義、そして思想の自由を求め続けているのである。

四

ここで少し、右に挙げた「他界の大杉君に送る書」に併せて、本稿第二節で述べたように、秋骨が大逆事件後笑いという視点から秋水を批評していたことを想起しておきたい。秋骨の特徴の一つは、この笑いや諷刺にある。島崎藤村は、秋骨の諷刺を斎藤緑雨の系譜を引くものであると鋭く指摘している。

藤村は、「戸川秋骨君の思ひ出」（『英語青年』第八一巻一二号、昭一四・九）のなかで、「君が異色ある随筆家として知られたのもそのサタイアによることで、これが戸川君だと言つて見るには、どうしてもその諷刺文学に行かねばならない。」と述べる。そして、

明治以来の文学者の中で、その方面に早い足跡を遺して行つた人に斎藤緑雨君がある。（略）鋭い諷刺にかけては当時同君の右に出るものはなく、多くの諸先輩に取つては煙たい存在であつたに相違ない。（略）今になつて思ひ出して見ると、この緑雨君から一番多くいろいろな影響を受けた人は、平田君でもなく、馬場君でもなく、またわたしでもなく、性格から何から一番遠さうな戸川君であつたと想ひ当るふしも多い。（略）君の諷刺文学を緑雨君の発展と言つてしまうのは、言ひ過ぎかも知れないが、緑雨君時代にはまだ軽かつた諷刺をもつとずつと内容のあるものに深めたのが戸川秋骨君だといふ風にわたしは考へたい。

と、秋骨と緑雨の親近性を指摘している。

秋骨は、緑雨と親しく交際した。秋骨の「斎藤緑雨（評伝）」（『文章世界』第一巻六号、明三九・三）には、明治二九年一〇月、秋骨の下宿に緑雨が一葉の危篤を知らせ事後の相談をしに来たのが最初の出会いであり、その後緑雨が亡くなるまで、深い交友を結んだことが記されている。

余の斎藤緑雨君と知己になつたのは明治二十九年十月下旬の事であつたと思ふ。或る夜君は余の下宿を訪はれ、一葉女史の病危篤に瀕せる由を報じ、且つ其後事の相談に及ばれたのが其始めであつた。（略）この時の事が深い感銘を余の

脳裏に刻むだのは当然であらう。実に余は緑雨君の事を忘れる事が出来ないのである。この事のあつてから後は互に往来し、伴れだちて鳥屋の二階へ上つた事もある、（略）殊に郊外の散歩は君の好む所であつたが、向島熊谷堤雑司谷目白方面と諸方を歩き廻つたことは夥しいのであつた。のち余は明治三十一年の九月を以て山口にゆき、それよりは日常手紙の往復をのみして夏の休暇に上京する時には必らず遇ふ事に仕て居た。然るに明治三十五年の夏上京した時、君は小田原に居られたが、態々手紙をよこし、是非遊びに来る様、（略）云ひ送られたのであつた。不幸にして（略）別に私用のあつた為め余は緑雨君の好意に反いたが、これがため爾来終に君と相見るの機を失し、永久に別れる事となつた。（略）余の緑雨君との交りは斯くの如く短くあるが、其始めがロオマンチツクで、終りがやゝセンチメンタルなので余の君から受けた感銘も尋常でないのである。

ちなみに、緑雨が亡くなるのは明治三七年四月のことである。秋骨にとって緑雨は、「忘れる事が出来ない」人であった。

秋骨は、世間から怖れられた緑雨の鋭い皮肉や冷酷さについて理解し、緑雨の本質を捉えようと様々な分析を試みている。「斎藤緑雨君とチヤアルズ・ラム」（『報知新聞』、大一四・四・九～一九）で、秋骨は、「私は斎藤君とは可なり親しくした。従つて少くともその半面は知つて居るつもりである。」と述べ、次のように記している。

特に緑雨君はそんなよい方面を露出したり、若くは弱音を吐いたりするのが禁物であつたと見える。その結果は往往自分の思つて居る処とは反対な方面を表に露はす事になる。すると世間はこの反対な方面をそのまゝ受納する。さうなるとそれが緑雨君にはまたいよ〳〵馬鹿々々しく思はれるので、それが更にまた痛罵の因となる、といつたわけで、結局表面から推すと、緑雨君はたゞ冷酷な人となつて了ふのではなからうかと思ふ。しかし実の処は温情の豊かなといふのが真相ではあるまいか。強度の熱情の裏が、冷酷な言辞行動となつて顕はれて居ると見るのは非であらうか。

秋骨は、このように緑雨の冷酷な言葉の裏に「温情」や「熱情」があると見る。そして、「偽善の反対なる偽悪の人であつた。」というのである。

秋骨は、緑雨に「日露戦争以後の東京市を見せて、其批判を聞き度くも感ずる」（「斎藤緑雨（評伝）」、前出）という。私も以前、緑雨と幸徳秋水の親交に注目し、緑雨が秋水の非戦論に影響を与えたことを述べた論[12]で、「緑雨が生き続けていたとしたら、秋水は「大逆事件」に性急に巻き込まれていっただろうか。そして緑雨は、秋水の処刑に際して、一体どのような言葉を発していただろうか」と書いたことがある。もし緑雨が秋水の傍に存在し続けていたら、秋水は秋骨のいう「笑はない人」や「余裕がない」人にはならなかったかもしれない。秋骨の笑いという視点からの批評には、緑雨と重なるものがあるのではないか。だがまた緑雨なら、秋骨よりも激しく、親しかった秋水の死を嘆き、もっと痛烈な皮肉でこの裁判を嘲罵したかもしれない。

秋骨は、思想・言論の自由が制限されていく時代に鋭く切り込む面を持ちつつ、一方では笑いの要素を含ませようとする。緑雨も、表現の自由が制限されることに反発したことがある。明治三三年一一月、劇場取締規則が警視庁から改正発布され、その第二三条において「勧善懲悪の主旨に背戻する」演劇は「興行することを得ず」と定められる。緑雨はこれを危惧し、翌三四年一月の大野酒竹宛書簡で、「一同団結して社会に対抗する」ことを訴えているのである[13]。

秋骨は、緑雨の笑いを受け継いでいるといえる。

おわりに

戸川秋骨は、馬場孤蝶が衆議院選挙に立候補した際に刊行された『現代文集』には寄稿していない。だが秋骨も孤蝶と同様に、大逆事件前後の思想・言論の自由に対する抑圧や、発禁処分を批判し続けている。そして、西洋の思想や文学を排斥し、儒教的道徳を強化する動きに抵抗しているのである。

明治末期から大正にかけて反動する時代に、秋骨も孤蝶も自由な精神を求め、西洋の思想や文学を重視することを訴え続けている。明治中期、『文学界』で活躍した人々が、その後こういった発言を繰り返していたことは、大逆事件前後の抑圧の

時代に伏流する一つの抵抗の動きとして、光を当てられねばならないのではないか。

秋骨の、大逆事件後に書かれた幸徳秋水を評する文章や、関東大震災で殺害された大杉栄を追悼する文章は、秋骨の独自性が笑いにあることを示している。

そしてここに、同じく笑いという特質によって、時代の風潮や権力に鋭く切り込んだ、斎藤緑雨の影を見ることもできるのである。

注

（1）拙論「馬場孤蝶と与謝野寛、大正四年衆議院選挙立候補―大逆事件への文壇の抵抗―」（『近代文学試論』第四八号、二〇一〇・一二）

（2）拙論「『孤蝶馬場勝彌氏立候補後援現代文集』と思想・言論の自由―書いた作家・書けなかった作家・書かなかった作家―」（『甲南大学紀要文学編』第一六四号、二〇一四・三）

（3）拙論「『孤蝶馬場勝彌氏立候補後援現代文集』と思想・言論の自由」（前出）で、この広告には名前があるのに『現代文集』に掲載されていない作家をピックアップした。戸川秋骨（広告では「戸河秋骨」）を含め、森鷗外や幸田露伴など三三名いることを確認した。

（4）後に、『戸川秋骨　人物肖像集』（二〇〇四・三、みすず書房）に「「秋骨船」上船案内」として収録。

（5）近年、松井浩章『凡人崇拝」の非凡人　評伝戸川秋骨物語』（二〇二一・二、熊日出版）も出版されている。

（6）拙論「発売禁止の潮流と馬場孤蝶『社会的近代文芸』―思想・言論の「絶対の自由」を求めて―」（『甲南大学紀要文学編』第一六七号、二〇一七・三）、拙論「夏目漱石「私の個人主義」に見る大逆事件への抵抗―馬場孤蝶衆議院選挙立候補と新聞・雑誌記事を手掛かりに―」（『甲南大学紀要文学編』第一七一号、二〇二一・三）、拙論「馬場孤蝶衆議院選挙立候補における女性作家たちの応援―与謝野晶子・『青鞜』と、孤蝶の女性論―」（『甲南大学紀要文学編』第一七二号、二〇二二・三）等で論じている。

（7）秋骨はこの文章で、「女学生上りの女優が出来ので（略）これから家庭の堕落が起るかも知れぬ。」という『朝日新聞』に書かれた三輪田元道の説に言及し、「嘔吐を催した」と抗議している。そして、「娘をして女優たらしむる家庭は軟化せる家庭であると云ふのは何といふ無礼な且つ鄙しい心の言葉であらう。」といい、「僕の言葉が可笑しいと思へば少しイプセンを読むで呉れ給へ」と述べている。秋骨『凡人崇拝』（大一五・二、アルス）の「非武士道論の悲哀」には、「又武士道と同じように人のよく口にした流行の言葉がありました。賢母良妻といふのがそれです。（略）若しこんな考へが実際に世に行はれるようになつたら、一つたゝき壊してやらうと考へて居ました」とある。秋骨は、女優を蔑視することに抗議し、女性解放を抑圧する儒教的良妻賢母主義を批判していることも、付言しておきたい。

（8）「文部省訓令と地方庁」（『読売新聞』、明三九・六・二七）には、「各地方庁にては文部省訓令第一号の旨趣を貫徹する為め目下具体的案を作成中の由なるが小説雑誌等の審査を遂げ青年の読物として有害ならずと認めたるものを公表し」とあり、この訓令は急速に実行されていくことが分かる。

（9）秋骨は、「前のが必要のものであつたとすれば、文相は自然主義禁圧の訓令を出さなければならなかつた」と書いているため、明治四一年頃に文部省が出した訓令を『官報』等で調べたが、該当するものは見当たらなかった。

（10）秋骨は続けて、「夏目さんは随分ニガ〳〵しい顔をして居るが、心には笑のある人である。その小説は一見してユーモアに富んで居る事を示して居るが、小説でなくどんな笑をぬきにしたものであつても、自から一條の和気のその内に漂つて居るのがほの見える。余裕派低徊趣味など云ふ事の説かれたのも自から依つて来る処は此のこの辺にあるので、その意味は中々深いのである。」と述べ、秋水と夏目漱石を対比している。秋骨は漱石と親しく交際したが、二人の文学における笑いという接点も注目される。

（11）明治四三年九月一六日から一〇月四日まで『東京朝日新聞』に一四回に渡り連載された「危険なる洋書」への反論と見られる。九月一七日にイプセン、一八日にトルストイ、二一日にエデキント（秋骨の表記はヴエテキント）が取り上げられている。

（12）拙論「緑雨と秋水―それぞれの『非戦論』―」（『国文学攷』第一八四号、二〇〇四・一二）

（13）「斎藤緑雨氏の書翰」（『斎藤緑雨全集』第二巻、一九九四・三、筑摩書房）参照。拙論「日清戦争後の緑雨―国家主義化への抵抗―」（『近代文学試論』第四二号、二〇〇四・一二）で述べている。